

依存した生活

田村 辰男

私は高校3年生の時にクラブ活動中(器械体操)の事故で頸椎損傷になり、受傷して39年になります。4年あまり病院に入院し、その後在宅生活を始めました。

在宅生活では趣味のアマチュア無線を楽しみつつ、就労に繋がりたいと思い、パソコンを勉強しました。当時はコンピューターの資格試験として情報処理技術者試験というのがあり、第二種情報処理技術者試験を受け合格もしました。さらに簿記も就労に有利ではないかと日商簿記2級等も習得しました。

将来は母親が介護できなくなれば療護施設に入ろうと考えていたので、ホームヘルパーを利用するというつもりでもありませんでした。介護面については親に任せっきりという状態です。入浴することはあまりなく、清拭だけでしたが特に気になりませんでした。と言うか気にしないようにしました。日々の洗面や食事またトイレなど様々な面でかなり問題がありましたが、仕方がないと我慢するような生活でした。本当に困っていることから目をそらし、現実逃避していたのです。いろいろな事を仕方がないことと、自分に言い聞かせていたようにも思います。イライラする時は両親などに八つ当たりもしていました。

在宅生活が3年を過ぎた頃、たまたま私が住む市内に療護施設が新設されました。介護で限界を感じていた私は迷わず施設に入りました。最初の一年は天国の様に感じました。決まった時間に食事が食べれ、週二回でしたが入浴も出来、夜間も体位交換をしてもらえます。いろいろなイベントがあり、それらも最初は楽しかったのです。山の中の施設でしたので、自然があふれ空気も美味しかったように思います。完成したばかりの施設は綺麗な建物、そして二人部屋でしたが自分の空間があり、とても満足出来るものでした。時々来る友人たちはとても良い所だねと絶賛してくれました。

しかし、天国と感じたのは最初の一年だけで、毎日見る自然はすぐに飽き came。イベントも同じ繰り返しは退屈でしかなく、何日頃からか参加しなくなりました。

退屈しかけた頃、障害者の友人が「車椅子市民集会」と言うものに声をかけてくれました。そこで重度障害者の自立生活と言うものを知りました。どんなに重い障害者でも介助者さえ確保すれば、地域の中で暮らすことが可能になるということです。衝撃を受けました。重度の障害者は親兄弟と暮らすのが当たり前、それが無理なら施設で暮らすしかないと考えていたからです。障害者は施設で暮らすことが常識で、それ以外の方法があるなどとは全く考えもしませんでした。

自立生活の様子を報告してくれる先輩障害者は輝いて見えました。大学の前でボランティア募集のビラ配りなどを行うという話も楽しそうに思えたのです。

その後、自立生活について情報を集めれば、集めるほど逆に閉鎖的な空間で管理される施設は「おかしい」と感じるようになっていきました。すべてのことが職員によって決められ、何かしたいと思ったら職員の許可が必要となる生活には嫌気がさしてきたのです。

施設生活10年で終止符を打ちました。施設は次から次へと規則を作り、さらに窮屈なものとなっていったのです。それらにブチ切れて自立生活を始めたようにも思います。

介護保険が開始され、介護職に注目があリタイミングが良かったと思います。個人で作った任意団体で広告を出してもかなりの応募がありました。

さらに、2003年の障害者支援費制度の開始と共に障害者仲間で作ったNPO法人で介護サービスを開始することが出来たのです。最初、障害者3人だけのための事業所でしたが、今では20人近

い障害者に派遣を行うようになりました。

仲間や支援してくれるスタッフのおかげで自分の理想とした生活を獲得出来たと思っています。施設にいた反動からか、スケジュールというものには反感を持っています。一日の流れや一週間の生活は入浴等を除き、自分で自由に決めています。朝起きれば、食事そして洗面といった最低限の流れはありますが、その日何をしようというのは気分を決めるのです。私にはこの形が合っているように思います。天候や体調によって外出するしないも決めています。食事も何を食べるというのはその時の気分次第です。出前を取ったり外食もその時々です。生活全般を他人に決められていた施設を全否定し、自分で決めることを楽しんでいるのです。

最後になりましたが、若いまたは受傷歴の浅い方へのアドバイスとしては「介護面」を優先して考えていただきたいと思います。親や兄弟に依存することにはとても危険であると警告をしたいです。就労は運良くできたとしても、親等に頼った生活は時間の問題で崩れてしまいます。

さらに外に出ることを何よりお勧めしたいです。いろいろな事に興味を持ち、とりあえずは出かけてください。出会いを楽しんでください。「生きる」ためのヒントが貰えるはずです。海外旅行というのも面白いです。日本が最もバリアフリーだと考えているならとんでもないことです。費用面を考えると東南アジアが良いかもしれません。きっと驚くような発見がありますよ。



NPO 法人花見



USA ディズニーランド



車椅子市民集会